

いっすんぼうし

ゆあのだいぼうけん





Illustrated by
Chinatsu Washikita

<https://chinatsuwashikita.com/>

Written by
JibunEHON

Publisher by
JibunEHON
<https://jibun-ehon.com/>

©2023 JibunEHON, Chinatsu Washikita

むかし あるところに、おじいさんと おばあさんが
すんでいました。

いつまでたっても、こどもが いませんでしたので、
すごく さみしい おもいを していました。

そこで、おじいさんと おばあさんは、おそらを みあげては、
「こどもが さずかりますように」と、
まいにち まいにち おねがいしていました。



すると あるひ、おばあさんが おなかが いたいと
おもっていたら なんと あかんぼうが うまれました。
しかし そのあかんぼうは、
とても ちいさい おんなのこで、
からだは いっすんたらずで、
ての ゆびほどしか ありません。



おじいさんと おばあさんは おどろいたけれど、
すごく よろこび、いっしょうけんめい
なまえを かんがえて、
ゆあ という なまえを つけました。
そして、とても かわいがって そだてました。



それでも、せいちょうとともに みんなより、
まいや うた けんじゅつも できるように になりました。
でも、からだは かわらず うまれたままです。
だから みんなから ばかにされるし、
いえの てつだいも できません。



ところが、ゆあは、いくつになっても
うまれたままで いっこうに おおきくなりません。
むらの ひとたちは、ゆあのことを
いっすんぼうし とよび、
「やーい やーい。ちびすけの いっすんぼうし」といって、
ばかにするように になりました。




そんな ゆあの たのしみは、
いろんな ひとから みやこの おはなしを
きくことでした。



ゆあは、あるひ おじいさんと おばあさんに むかって、
「わたしは みやこに いきます。
もっと ひろいせかいを みてみたいのです。
きっと たくましくなって かえってきます。」と いいました。
おじいさんと おばあさんは、びっくりして ひきとめたけれど、
ゆあの いしは かたく あきらめそうに ありません。
「ゆあも もうおとなじゃ」と おもい、
ゆあのことを おうえんすることにしました。

おじいさんと おばあさんは、
ゆあのために
かさように おわんを
つえように はしを
かたなように はりを
それぞれ じゅんびし、
たびの したくを ととのえて あげました。





ゆあは、いわれた とおり
そのみちを まっすぐ あるいて いくと、
やがて おおきな かわが、しずしずと ながれていました。
ちいさな ゆあにとって、
おおきな かわは うみのように かんじました。

おじいさんと おばあさんは、ゆあに
「みやこへ いくには、このみちを まっすぐ いくと、
おおきな かわに でのるから、そのかわを あきらめずに
のぼって いくんだよ」と おしえ
ゆあが みえなくなるまで みおくりました。

ゆあは、そのおおきな かわに おわんを うかべ、
はしを つかって こぎのぼって きました。
とちゅう なんども あきらめ かけたけれど、
そのたびに おじいさんと おばあさんの ことばを
おもいだし、くるひも くるひも かわを こぎのぼりました。

そのうち、いえや ひとが
おおくなり はじめました。
「ついに みやこに ついたか」と、
おもい おおきな はしのそばに
ふねを つけ、どてを のぼりました。



みやこには ひとが たくさん
あふれかえっていました。
ゆあは、たくさんの あしのあいだを
ふみつけられないように、きをつけながら
あちこち みてまわり、だんだん ひとが
すくないほうへ あるいていきました。
すると、おおきな おやしきが ありました。





「なんと りっぱな おやしきだ。ここなら なにか わたしに
できることが あるかもしれない」と、おもい もんをくぐり、
おおきな かいだんのしたに たつと、おおごえで、
「おたのみ もうします！」と いいました。

すると、おくから りっぱな みなりのひとが でてきて、
あたりを みまわして、
「おや、こえがしたのに、だれも おらぬな」と、いいました。

そこで、ゆあは いそいで、
「ここに おります。げたのそばに おります」と さげびました。
そのひとが げたのそばを みると、
そこに ゆあが たっていました。



そのひとは おどろいて、
ゆあを てのひらにのせ
「なにをしに ここに きたのか」と ききました。
ゆあが みやこに でてきた りゆうを はなすと、
そのひとは きょうみぶかそうに、
「からだか すごく ちいさいようだが
なにが できるというのだ」と、いいました。

そこで、ゆあは しばらく かんがえて
かいだんの うえにおり、とくいな まいを
まって みせました。
すると、そのひとは ほーと ささやきました。



つぎに、「かみを いちまい おとしてください」と おねがいし、
そのひとは かみを いちまい おとしたしゅんかん、
ゆあは とりゃーと とびあがり こしの はりを
ひきぬくと かみの どまんなかに ぶすっと
さして みせました。
すると、そのひとは おおっと めをみひらき おどろきました。
そして、ゆあに
「おもしろい ここで はたらいてみなさい」と いいました。






わかさまが なにかするたびに
ゆあが よばれて おせわを していました。
こうして いっしょうけんめい はたらくうちに、
みんなから しんらいされるようになりました。

ゆあの たずねた いえは、
みやこで ゆうめいな だいじんの おやしきでした。
なかでも いちばん ゆあを
きにいったのが、だいじんの わかさまでした。





あるひ、ゆあは、わかさまの おともで、
きよみずでらへ おまいりに いくことに なりました。
すると、そのかえりみち、きゅうに きのかげから
おおきな あかおにが とびだしてきました。
あかおには りょうてを ひろげて たちふさがり、
ものすごい かおで にらみつけてきました。
そのてには、こんぼう こしには こづちを さげています。
そこで、ゆあは、あかおにの まえにでて、
「そこをどけ！」と さげびました。



「いたい、やめてくれー まいった まいった こうさんだ!」と、
あかおには さげびました。

そこで、ゆあが、あかおにの くちから とびだすと、
あかおには こしのこづちを おとしたのも きづかず、
いちもくさんに にげていきました。

あかおにが こしをかがめて
まわりを みまわすが だれもいません。
そのすきをついて ゆあは とびあがると
あかおにの はなを こしのはりで
ちくっ! ぶすっ!

あかおには びっくりして おおきなくちを あけたところに、
まってましたと ゆあは そのくちに とびこんで、
ちくっ! ぶすっ!

ゆあは こづちを ひろうと
「わかさま あかおにが これを おとしていきました」
と いうと、わかさまは
「これは、うちでのこづちという たからものです。
これを ふれば、どんなねがいも かなうといいます。
ゆあ、そなたのねがいは なんですか？」と いいました。
そこで、ゆあは、
「わたしのねがいは、みなさんのように からだが
おおきくなることです」と いいました。

すると わかさまは、
「ゆあの からだが おおきくなれ！」と いうて、
うちでのこづちを ひとふり したところ、



ずずん！ずずん！ずずん！と、
ゆあの せが あっというまに のびました。
そして、わかさまのまえには、
きれいな わかものが たっていました。



ゆあのとがらは、
みやこじゅうに
しられるようになり、
もう いっすんぼうし
と いった
ばかにするひとはいません。

やがて、ゆあは、
わかさまとけっこんし、
おじいさん おばあさんと いっしょに、
しあわせに くらしましたとき。



ゆあちゃん これから いろんなことがあるけど、

この えほんのように いろんなことに

ちゃれんじ して行ってね。

パパとママより



すたーと

1

2

3

4

おおあめでながされる
すたーともどる

23

うさぎをまつ
1かいやすみ

24

22

25

21

おむすびをおとす
2つもどる

5

6

27

26

7

こううんの
3つすすむ

28

8

29

およぎがじょうずになる
2つすすむ

35

9

19

10

18

30

34

11

17

31

32

33

12

かえるのうたをきく
1かいやすみ

16

おんせんで
あたたまる
1かいやすみ

15

14

13

うさぎとうさぎとび
4つすすむ

